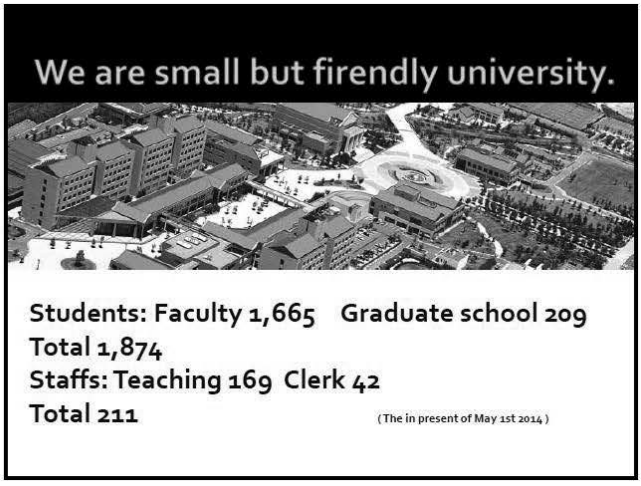
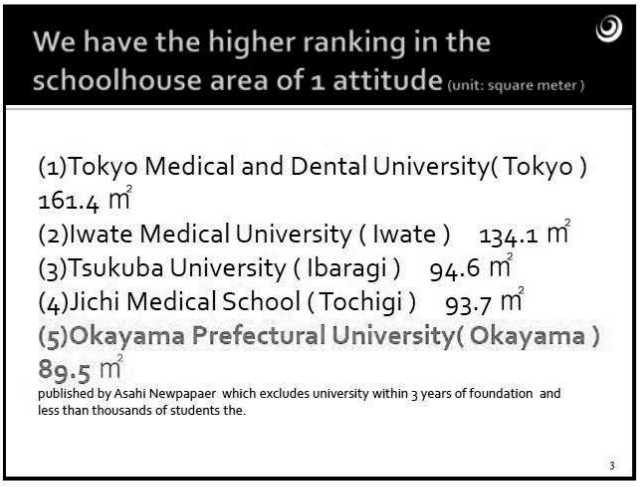
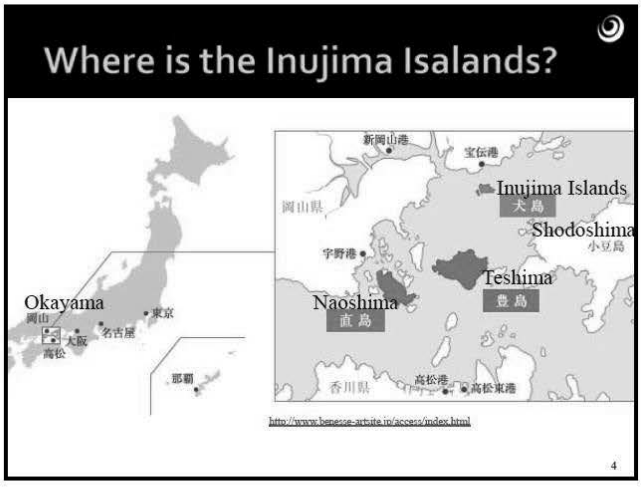
5.「アジア・太平洋環境コンソーシアム ESD 国際シンポジウム」講演資料

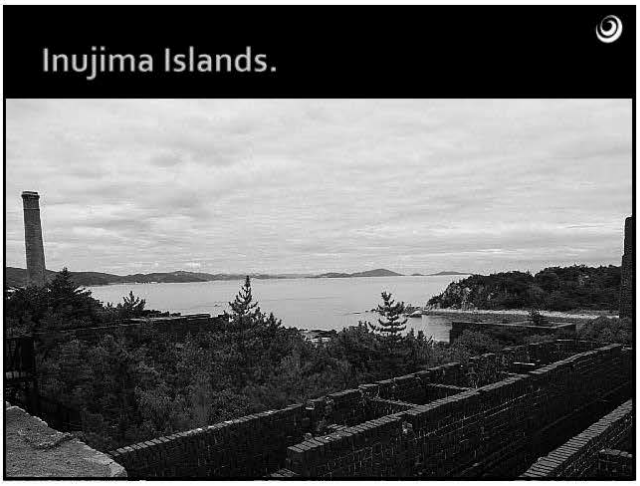
基調講演①「瀬戸内海・犬島における ESD 教育プログラムの開発
～ワークショップ事例発表：いぬじま探検隊～」

森下　眞行　岡山県立大学　学科長・専攻長・教授
岡山県立大学　デザイン学部学生









Inujima Green Map 2012

Inujima Green Map 2013

Our Purpose

We provide a place to think about new values and lifestyles through workshop in Inujima for the children responsible for the next generation.

次世代を担う小中学生を対象に、犬島でのワークショップ活動を通じて、新しい価値観やライフスタイルについて考える場を提供すること

Our Goals

1. An ability to consider the connection of the future lifestyle through learning the history and culture of ilands in the Seto Inland Sea.

瀬戸内海の離島の歴史や文化を学びながら、未来とのつながりを考えられる力

Our Goals

2. An ability to consider of the relationship between their lives and communities, while learning the current situation and problems in the islands.

離島の現状と課題を学びながら、自らの生活や地域社会との関係性と結び付けて考えられる主体的な力

Our Goals

3. An ability to expand the changes in attitudes and behavior of their own life style and values, throughout many experiences.

体験を通じて得た自らのライフスタイルや価値観の意識や行動の変化、変容を拡散できる力

INUJIMA×ESD
「犬島探検隊」

岡山県立大学　デザイン学部
OKAYAMA PREFECTURAL UNIVERSITY
Department of Design

乾井 郁香　Ayaka Inui
西村 麻里　Mari Nishimura
横田 広樹　Hiroki Yokota

概要
Sammary

活動期間	2014 年 4 月～ 8 月
メンバー	デザイン学部生 16 名（4 年 3 人　3 年 5 人　2 年 2 人　1 年 6 人）
場所	岡山県岡山市東区犬島
実施日	2014.8.26 ～ 27
対象	小学校 3 ～ 4 年生とその保護者 小学 3・4 年生 10 人　幼稚園 1 名　保護者 2 名
目的	経験値 UP
ねらい	世界観を作り込み、子供たちを引き込む。

Sammary

Active period	April-August 2014
Members	Design undergraduate:16 (4th grade:3　3rd grade:5　2nd grade:2　1st grade:6)
Place	Okayama, Okayama Prefecture, Higashi-ku, Inujima
Implementation date	2014.8.26 ~ 27
Target	3-4 grade students and their parents (Student 3 - 4 year:10　Kindergartener:1　Adult:2)
Purpose	Experience value UP
Aim	The elaboration the world, to draw the children.

目的
Purpose

小学 3、4 年生を対象とした探検型ワークショップによる ESD 教育。
実際に犬島の自然に触れながら自分たちの生活を考え直すきっかけづくりや
経験値アップ（考察力、行動力、協調性、感性）を身に付けてもらう。

Purpose

The ESD education by exploring type workshops for Student grade 3 and 4.

Actually touching nature of Inujima, and create opportunities to rethink of their life Experience value up And learning (discussion force, action force, coordination, sensibility)

ねらい
大切にしたこと
Goals

ただの宝探しでは面白くない、デザイン学部の私たちにできること…

参加する子供たちに日常と違った体験をしてもらえるように
「世界観」を作り込み、その演出に力を入れた。

子供たちを引き込み、積極的に参加できる環境を作り上げた。

Goals

It is not interesting just a treasure hunt.
But what can our design department ...

So you get a experience that was unlike everyday to children who are participating Dent create a "world view", was focused on the production.

Draws children, I created the environment that can participate actively.

PROCESS

Research
Planning
work

4 April — **ESDに関する調査** Research about ESD.
5 May — **犬島・対象 (小学生) に関する調査** Research about student and Inujima.
6 June — **テーマ、実施内容の検討** Themes and content planning.
7 July — **広報活動、制作物検討、制作** Public relations,Planning of production,Work.
8 August — **制作、実施** Work,The day .

4 April

Research

ESDに関する調査

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

ESDの調査

Research about ESD.

・インターネット、文献による調査
The research by the Internet and books.

・地域活動 (岡山) の調査
The research of the ESD activity of Okayama.

・ESD 教育の定義の分析、理解
Understand the definition of ESD.

5 May

Research

犬島・対象 (小学生) に関する調査

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

小学生 (対象) に関する調査

Research about student.

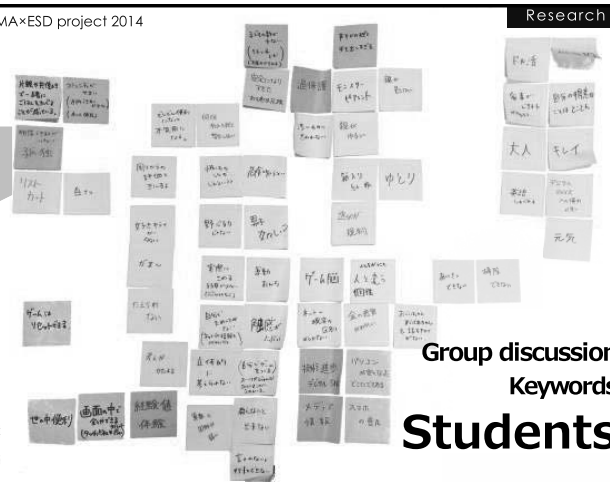
・インターネット、文献からの調査
The research by the Internet and books.

・グループディスカッション
Group discussion.

INUJIMA×ESD project 2014

Research

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August



Group discussion
Keywords
Students

INUJIMA×ESD project 2014

Research

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

犬島に関する調査

Research about INUJIMA.

・インターネット、文献による調査
The research by the Internet and books.

・グリーンマップを使用した調査
（2014.05.03）
Research in Inujima using the Green Map

・グループディスカッション
Group discussion.

INUJIMA×ESD project 2014

Research

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

INUJIMA
Group discussion
Keywords

INUJIMA×ESD project 2014

Research

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

調査からの考察
Consideration

犬島 Inujima

日常生活とは異なった
環境、空間に囲まれている。

Inujima is a space
that is surrounded by nature ,
and non- daily

小学生 Students

情報通信環境やゲームの
発達により、リアルな体験が
少ないのではないか。

children's realistic experience
is decreasing because
the Internet and video games
have evolved.

自然を体感し、小学生の経験値 UP する必要性がある。
It is necessary to raise an experience value by a real experience.

犬島で探検型のワークショップを行う。
Exploration type workshop

INUJIMA×ESD project 2014

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

6 June

Research&Planning

調査、テーマ、実施内容の検討、宣伝活動

INUJIMA×ESD project 2014

Planning

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

テーマ、実施内容の検討

Themes and content

・テーマ決定
Theme decision

・ストーリー設定
Story Settings

・実施ワークショップ内容の検討
Workshop contents examined

INUJIMA×ESD project 2014

Planning

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

テーマ
Theme

探 検
Adventure

ストーリー
Story

いぬじま探検隊　2014
Inujima expedition 2014

探検隊の一員となり、
犬島にある秘宝を見つけ出す。

The students look for treasure
as a member of the expedition.

世界観
World view

世界観を作り込み、子供たちが
世界へ入り込んで非日常を味わう。

Elaboration view of the world, children
It enters into the world to taste the extraordinary.

INUJIMA×ESD project 2014

Planning

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

Mission ！ ▶ Clear ！ ▶ Get ！

INUJIMA×ESD project 2014

Planning

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

実施ワークショップ内容

Mission 1	島内探検 Exploration of Inujima	考察力、行動力 Discussion force, Ability to take action
Mission 2	竹水鉄砲づくり Make a water gun of bamboo	創造性、協調性 Creativity, Cooperativeness
Mission 3	犬島の地図を描く Draw a map of Inujima	協調性、感性 Cooperativeness, Sensibility
LAST Mission	お宝発見 Find the treasure	成 果、結果 Outcome,Result

INUJIMA×ESD project 2014

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

7
July

Work

広報活動、制作物検討、制作

INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

広報活動
Public relations

・ポスター制作
Poster production

・小学校へ出向き広報活動
Public relations

・配布資料制作
Handouts production

INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

対象
Target

- 小学 3 ～ 4 年生
  Elementary school 3 years , 4 years
- 主に岡山県総社市内
  Lives in Soja city,Okayama Prefecture

ポスター
Poster

INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

参加者配布資料
Participant handouts

INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

制作物検討、制作
Examination、work

・３つのグループで必要なものを検討
Divided into three groups, and consider what you need in this project

・スケッチや試作により制作に入る
Produce on the basis of the sketches and prototypes

INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

各グループによる制作

企画 Planner

- **台本** scenario
- **登場人物** character
- **映像** picture

ビジュアル art director

- **ロゴマーク** logo
- **冊子** booklet
- **地図** map
- **ワッペン** emblem
- **バンダナ** bandanna

ものづくり product designer

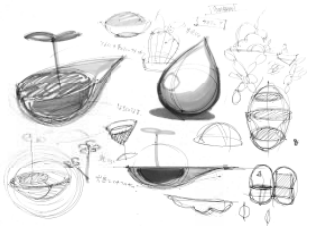
- **宝箱** treasure chest
- **装備品** general tools
- **お宝** treasure
- **竹水鉄砲** Water gun made of bamboo

INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

スケッチや試作による検討
Examination



お宝のスケッチ
Idea sketch of treasure

ロゴマークのアイデアスケッチ
Idea sketch of logo

INUJIMA×ESD project 2014

8
August

work

制作

INUJIMA×ESD project 2014

Work

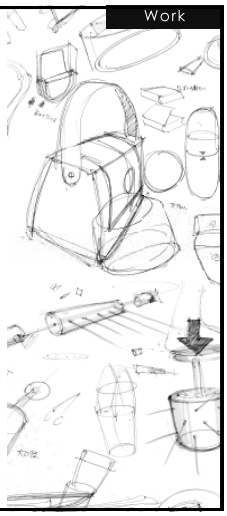
4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

制作
Work

・小道具類の制作
produce the props

・最終確認…制作物、内容
Final confirmation…fabrication,content

・犬島でプレを行う
Pre in Inujima



INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

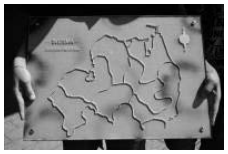
隊員グッズ
Expedition members Goods

INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

世界観をつくる小道具
Props to make the image of exploration



INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

INUJIMA×ESD project 2014

Work

4 April
5 May
6 June
7 July
8 August

INUJIMA×ESD project 2014

8
August
26~27

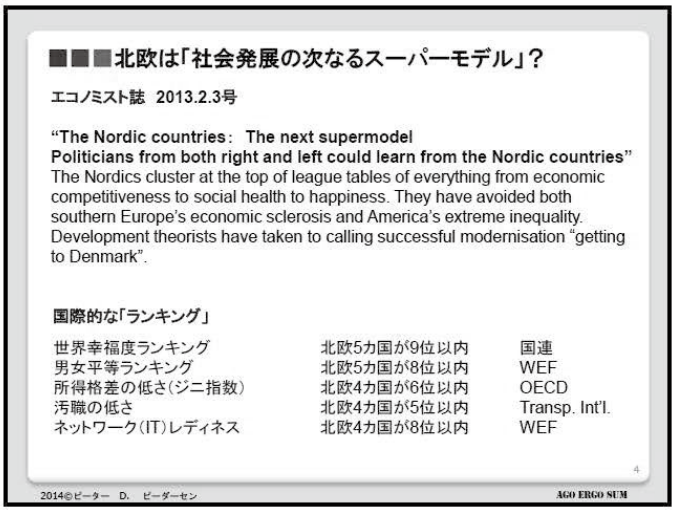
The day

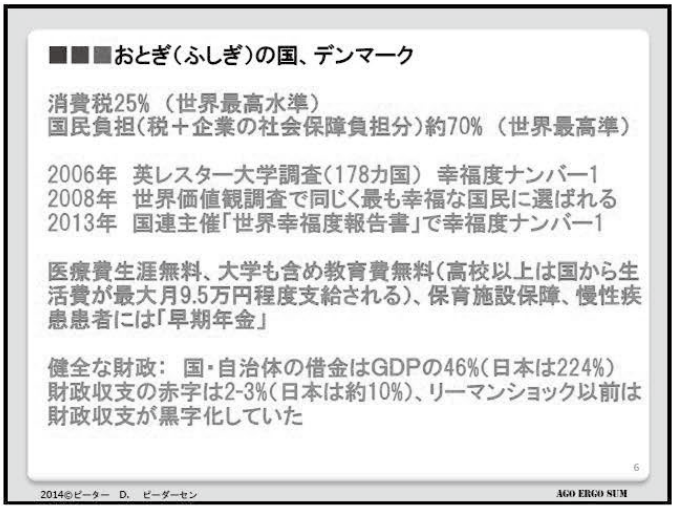
当日

5.「アジア・太平洋環境コンソーシアム ESD 国際シンポジウム」講演資料

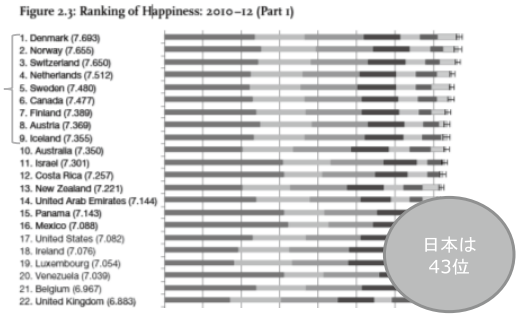
基調講演②「食とエネルギーの環境大国デンマークの経験に学ぶ」

ピーター D. ピーダーセン リーダーシップアカデミーTACL 代表





■■■国連の「世界幸福度報告書」(2013年／156カ国)



世論調査(幸福度実感に関する)／一人当たり国内総生産／社会的な支え／健康寿命／人生における選択の自由度／寛大さ／汚職の認識

■■■では、デンマークは「社会主義国家」？

デンマークは「資本主義」を歓迎し、それによって得られた果実の徹底的な「再分配」に努めている国

共同体への貢献を重んじているが、個人主義の国でもある。(社会的安全網があり、共同体が強いからこそ、自由に行動できる)

雇用政策は、日本より解雇しやすく、業種転換を促す(社会的安全網、再訓練の制度、無償の教育制度があるため)

デンマーク（北欧諸国）は純粋な資本主義・自由経済主義でもなければ、社会主義による計画経済でもない、「第三の道」といわれる。Mixed economy（混合経済）の成功例ともいえる

■■■19世紀～21世紀 「緑の福祉社会」への道 1/3

自由な教養と生涯教育

国民高等学校: 1844年に始動
2014年に79校
北欧全体で数百校

フリースクール: 1852年に始動
2014年に276校

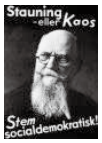
地域発の自助と助け合い(新しい経済社会)

乳製品製造
共同組合: 1882年に始動
1900年に950か所
(基本全て地方発)

消費者の購入
組合(生協): 1866年に始動
1914年に1400か所
(都市部は50のみ)。

■■■19世紀～20世紀 「緑の福祉社会」への道 2/3

協働型民主主義
と政策ビジョン



1930年代に、大恐慌を乗り越えるため、農民政党と労働者政党が大胆な合意を結び、福祉社会を本格的にスタートさせる。

その後、一貫して福祉政策を推進。
1950-1972年の好景気が後押しした。
社会福祉と効率的な経済運営は一体的に考えられてきた(矛盾するものではなく)

「村社会」の原理を社会
レベルに拡大

1800年以前のデンマークは、日本と似た「農村社会」。村における助け合いが基本。この精神が19世紀の「教養」と「自助」の取り組みにも継承され、さらに、福祉社会・環境先進社会の礎になっている。
目指してきたのは「強い共同体」と「よい社会」

■■■19世紀～20世紀 「緑の福祉社会」への道 3/3

「共同組合型企業」
は現代社会でも活躍

デンマークの主な農業・食品関連企業
例: Arla Foods 乳製品他
Danish Crown 精肉
Danaeg 卵
は現在も、「共同組合形式」のオーナーシップになっており、その売上合計は、国内総生産の約10%に達している。

Arla Foodsは世界に展開し、英国でも「100%農家所有」の会社となっている

Danaegは1895年に、農家の共同組合として設立され、初期から参加するにあたっての厳しい品質基準を適用していた

■■■1970年以降に動き出した環境共生社会

これまでみてきた精神・市民文化・政策ビジョン・市民と行政の有機的連携により、デンマークでは1970年代～1980年代にかけ、特に食とエネルギーの分野で本格的な環境共生社会が動き出した。これは、私が小学生のころ、全く「表面化」「具現化」していない動きばかりである。

■■■有機農産物・食品市場(オーガニック市場)

現状： 耕作地の7%(18万ヘクタール弱)が有機栽培、2650の農場が
完全有機に転換(専業農家の15～20%程度)
小売食品(外食除く)の有機のマーケットシェア： 7.6% (世界一)
一人当たり消費(金額ベース)： 世界第二位 (スイスが一位)
小売の牛乳に関しては、30%が有機(オーガニック)

どのスーパーにも必ず有機野菜、有機牛乳、有機食肉などのコーナーが設けられ、オーガニック食品は完全に「普通の選択」になっている。

価格は少々高いが、牛乳や野菜に関しては、10-20%の価格差に抑えられている場合が多く、買いやすい。

13

■■■有機農産物・食品市場(オーガニック市場の黎明期)

1980年代： 畑からの余剰な窒素が水源を脅かし内海で赤潮の原因に
メディアで広く取り上げられ、農業の在り方が問われる
パイオニアにより、有機農産物が徐々に登場し、限定的な
有機農産物の市場が成立

Stats-kontrolleret økologisk

1987年に、世界初の有機農業促進法が制定され、転換の
補助が始まる⇒有機農場が急増⇒供給が安定する。
同時に、有機マーク(左記)導入。現在、96%の認知率。

1990年代 初頭： 高価格により、市場は限定的。
1993年に最大のスーパーチェーンが意図的に値段を
大幅に下げ、他チェーンも追随し、市場が離陸
1999年まで成長し、その後一服も、2005年から急成長

2000年代 2003年～2012年、総販売量80%増(金額ベース)
2012年の国家戦略： 2020年までに公的機関の食堂で
60%以上の食材を有機に、栽培面積を現状の倍以上の
15%を目指す。

14

■■■エネルギー市場(特に再生可能エネルギー市場)

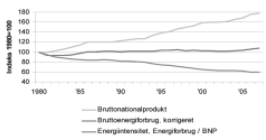
現状： 1970年に1.8%だったエネルギー自給率は、1997年に100%を
超え、現在は130―150%で推移している。
バイオマスが再生可能エネルギーの72%を占める
風力発電は電力生産の40%を占める(一人当たりでは世界一)

原子力発電は正式に1985年に断念し、現在北海生産の石油と、
風力、バイオマス、ヒートポンプなどによる再生可能エネルギーで
エネルギー自立を実現している。2050年に、再生可能エネルギー
で100%自給の国家戦略を実行中。

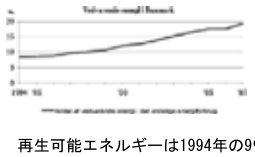
1990年～1992年にかけ、北欧4カ国で環境税(二酸化炭素排出に課税)が導入され、化石燃料からの転換を促している。デンマークでは、車の重量税も環境税と位置づけられ、総計で環境税は対GDPで4-5%に達している(日本でいえば、20兆円前後)

15

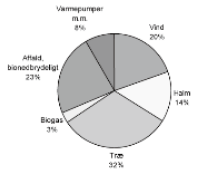
■■■エネルギー市場(再生可能エネルギーの成長カーブ)



1980年以降、経済成長は計80%であるのに対して、C02排出は減少している



再生可能エネルギーは1994年の9%弱から、現在は約25%(一次エネ)、電力生産においては40%超



出典： Energistyrelsen 2009

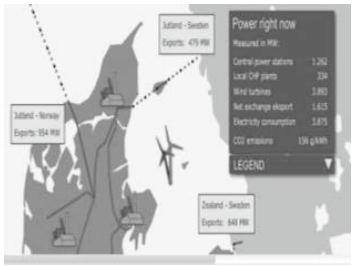
再生可能エネルギーの内訳：

バイオマス・バイオガス	72%
風力	20%
ヒートポンプなど	8%

⇒ デンマークはバイマス利用が進んでいるが、これはごく最近の動き

16

■■■国全体で、風力発電が電力の100%超をカバーする日も



www.energinet.dk

2013年11月4日
電力消費 3875 MwH

風力発電 3893 MwH

この情報は10分毎に更新される。

17

■■■ケーススタディ： 緑の福祉社会へ ロラン島の例 1／4

ロラン島
人口： 66,000人
面積： 1,243平方km

デンマークにおけるテン菜の一大生産地。私が小学生だった1970年代は、それ以外に目立った取り柄のない島だったが・・・

18

■■■ケーススタディ: 緑の福祉社会へ ロラン島の例 2／4

ロラン島沖の洋上ヴィンドファーム
90基が20万世帯分の電力を生産する

風力の余剰電力を使って、
「水素村」の実験も第二段階に
入った(40世帯の実験)。

19

■■■ケーススタディ: 緑の福祉社会へ ロラン島の例 3／4

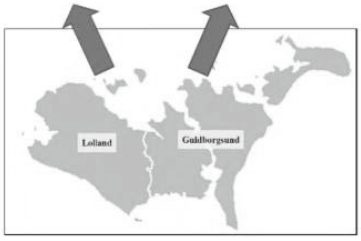
出典: レオ・クリステンセン

20

■■■ケーススタディ: 緑の福祉社会へ ロラン島の例 4／4

エネルギー年間売上高
300億円

農産物年間売上高
500億円



ロラン島＆ファルスタ島の人口＝11万人

出典: レオ・クリステンセン

21

■■■有機市場と再生可能エネルギー市場の共通点

パイオニアの勇気 ＋ 一般市民とメディアのバックアップ ＋ 先進的な政策(87年の有機農業促進法／76年から風車設置補助金40%、84年から電力買い取り義務／1992年から環境税) ＋ 産業界の自主的取り組み(1993年に大手スーパーが有機食品の価格を自主的に下げる／風力発電は第三の輸出産業に)

好循環、市場創造、そして市場原理へ ⇒ 環境成長経済 の実現

22

記念講演「日本における国連 ESD の 10 年の成果・課題と今後の展望」

阿部 治　立教大学教授・ESD 研究所所長・日本環境教育学会会長

ESDの10年とこれからの環境教育

阿部 治　立教大学 ESD研究所 所長

本年は、2002年の持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）で、日本のNGOと政府によって共同提案された国連「持続可能な開発のための教育」（ESD）の10年（2005～2014）の最終年にあたる。このため国連の担当機関であるユネスコが最終年会合に当たるESDユネスコ世界会議を本年11月に名古屋で開催する。同会議には、ユネスコのほぼ全加盟国の参加が予定されている。また、ユネスコ世界会議に先だって国連大学がすすめているESD地域推進拠点（RCE）の世界会議やESD推進校（ユネスコスクール）の世界会議など、ESDステークホルダー会議が岡山市で開催される。

2012年の国連持続可能な開発会議（リオ＋20）において、ESDの10年以降も国連はESDの推進に取り組むことが決議されたように、ESDの10年の終了をもって、その取り組みが終了するわけでは勿論ない。しかも、リオ＋20で2015年が最終年とされる国連ミレニアム開発目標（MDGs）の後継として国連持続可能な開発目標（SDGs）が決定され、現在、具体的目標などが検討されている。教育はSDGsの主要

な指標の一つとなっており、ESDへの期待は大きい。

筆者はESDの10年の提案にかかわったことから、この10年以上にわたって、ESDの普及に取り組んできた。そして、オールジャパンによる最終年会合の開催に向けて、多様なステークホルダーを巻き込みながらESD地球市民会議やESDテーマ会議というプレイベントを6年前から毎年開催している。特に本年は、国連大学や政府（文科省、環境省）・自治体、産業界、NGOなどと連携して、国連大学で8月20～22日に開催予定である。11月の名古屋での会合に際しても、多くのサイドイベントが開催される予定である。これらを活用して、ESDの取り組みを共有するとともに未だ十分に浸透しているとは言い難いESDをより多くの人々に伝えていくことが求められている。

ESDの10年が与えた影響

ESDの10年は、新たな法律の制定を含めて我が国の環境教育に大きな影響を与えた。先ず、ヨハネスブルグサミットに出席した国会議員を中心に超党派による議員立法として環境教育推進法が2003年に制定された。同法は、2011年の改正（呼称も環境教育等促進法と変更）で、環境教育は「環境の保全」に関する教育・学習から「持続可能な社会の構築を目指して、……環境と社会、経済及び文化とのつながりその他環境保全」に関する教育・学習とされ、ESDをより意識した内容へと変化した。

さらに教育基本法の改正（2006）で、教育の目標（第二条）の中に「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」などが新たに加えられたことも、ESDの10年が影響したものである。基本法を受けて教育振興基本計画や改訂学習指導要領を通じて、ESDや環境教育の取り組みが強化された。

ESDが影響を与えた直近の法律に消費者教育推進法（2012）がある。本法では、消費者市民社会の形成に主体的に参画する消費者を育成することが消費者教育であり、環境教育、食育、国際理解教育などと連携しながら進めることとされた。本法では、消費行動が地球環境などを通じて現世代ならびに将来世代に影響を与えることを自覚し、消費者が公正かつ持続可能な社会の形成に積

極的に参画することを求めている。

環境や開発、平和といった持続可能性にかかわる横断的な概念や育む能力、参加体験学習や協同学習といった学びの手法は、NGOが得意としてきたが、これまでは学校教育との接点は薄かった。ESDは教科横断型や学習者が自ら発見し、相互に学び合うアプローチなどに特徴がある。知識と体験を統合し、持続可能な社会に向けた市民としての基礎リテラシーを育んでいくこと、あるいは社会参加をしながら参加型民主主義を学んでいく市民性教育（シチズンシップ教育）の側面も有している。NGOが得意としてきたこれらのESDの学びの手法は、ESDの普及の過程で、教育現場との双方向の交流を活発化させることにつながった。

ポストESDの10年の環境教育

前述のように、ESDの10年の取り組みと共に従来の環境教育の枠が広がり、他の持続可能性にかかわる多様な教育活動と連携した取り組みが広がってきた。また、学校だけでなく企業や地域での取り組みが進められている日本のESDは、学校中心に取り組みがすすめられている他国には見られない特徴である。ESDは持続可能な社会をめざして多様なステークホルダーによる連携を促進してきたが、このことは、改正された環境教育促進法でも「協働」取り組みとして強調されている。協働の典型的な事例は、岡山市や北九州市に見られる多様なステークホルダーが参加し、持続可能な地域づくりの担い手を育てる視点から人材育成に取り組んでいるESD推進協議会である。

また、従来から取り組まれてきた持続可能な地域づくりに果たす教育・学習の役割を、ESDの視点から見直す動きが始まっている。たとえば、対馬市は「学びのエコアイランド」と称して、地域再生の柱の一つにESDを据えている。さらに奈良市のように世界文化遺産をかかえる自治体が世界遺産教育とESDをからめた取り組みを展開するなど、地域の特徴を生かしたESDが取り組まれている。

このような事例から、これからの環境教育は、テーマや主体がバラバラの取り組みではなく、多様なステークホルダーによる持続可能な地域づくりに統合された取り組みが広がっていくことが期待できる。そして、

これらの取り組みに必須なのが多様なステークホルダーをつなぐコーディネーターの存在である。前述したように、参加・体験、協働・連携といった新たな学びの手法に通じたコーディネーターの重要性への認識は益々高まっている。この意味で、今後はコーディネーター育成の具体化を図っていくことが求められている。

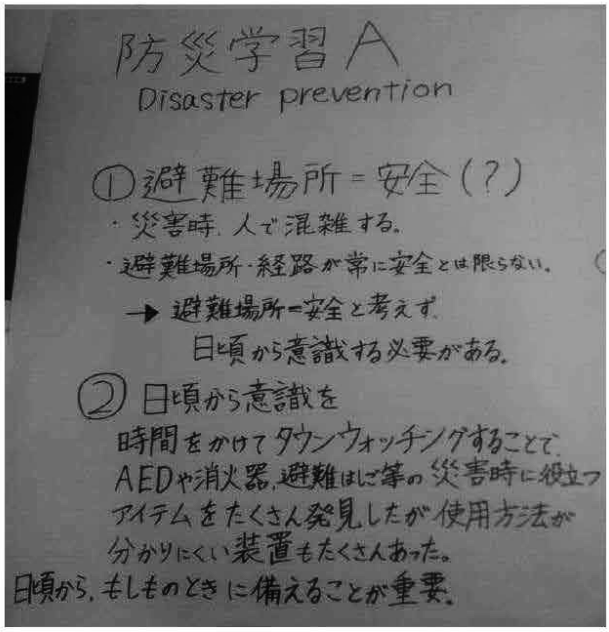
前述した持続可能な地域づくりは、近年目立ってきた集中豪雨などによる気象災害のように気候変動などの地球環境問題やTPPなど経済のグローバル化などをも意識した取り組みとならざるを得ない。すなわち、世界的な課題と地域の持続可能性とを切り結ぶことができるグローカル人材の育成である。全国的に進行している少子高齢化の動きは、世界に先駆けて到達した長寿社会の産物であり、過疎高齢化に伴う地域の衰退、里山の荒廃などは、他国においても近未来のシナリオである。とすれば、ESDによる持続可能な地域づくりの取り組みは、日本の比較優位性を発揮できる分野に他ならない。従来から行われてきた日本の公害経験などによる国際協力にプラスして、これからはESDによる国際協力に力を発揮することが可能となる。

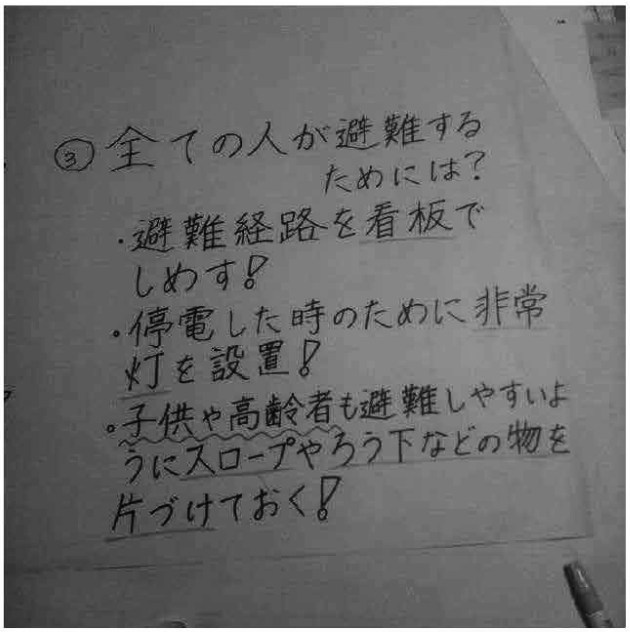
一方、産業界においても従来からCSRの一環として環境教育が取り組まれてきたが、あらゆるステークホルダーに持続可能な社会構築の社会的責任を規定したISO26000（2010）のコンセプトがESDと極めて親和性が高いこと、またその作成プロセスでESDの10年が言及されたことから、従来の環境教育の枠を広げてESDに取り組む企業も現れ始めている。近年、企業が力を入れてきたマルチステークホルダーダイアローグや地域の持続可能性への関与などは、今後ESDとの一環として捉えることができる。企業における環境教育の取り組みがESDの視点から再構成されることになるだろう。

あべ・おさむ
立教大学社会学部教授、同ESD研究所長。現在、日本環境教育学会会長、認定NPO法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議（ESD-J）代表理事、ESD世界の祭典推進フォーラム代表理事など。

6. 分科会発表資料

＜分科会発表　① 防災学習 A＞



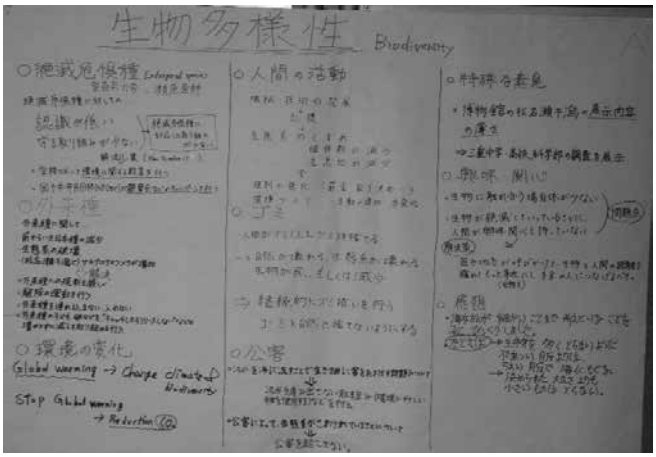


＜分科会発表　② 防災学習 B＞

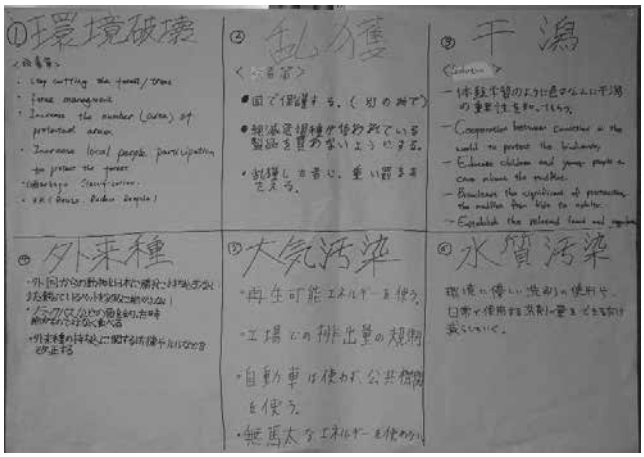
まとめ

- 大学の避難経路を改めて確認するのは、新鮮だった。
- 免震構造を知ることができてよかった。
- 免震構造というものが学内にはあり、私たちはそういったものに守られていることを知れた。
- 夜間などを想定したとき、電灯が足りないと思った。
- 側溝や電灯など身近にあるものも、避難の際には危険になることがあるということが分かった。

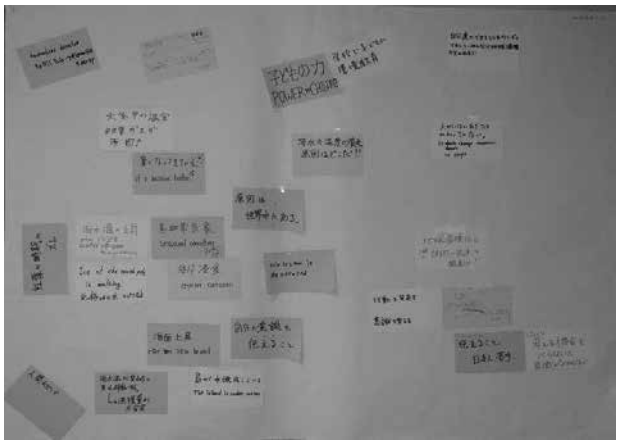
＜分科会発表　③ 生物多様性 A＞

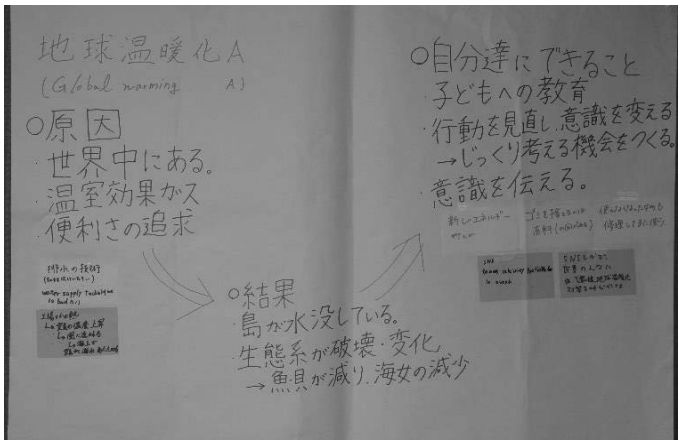


＜分科会発表　④ 生物多様性 B＞

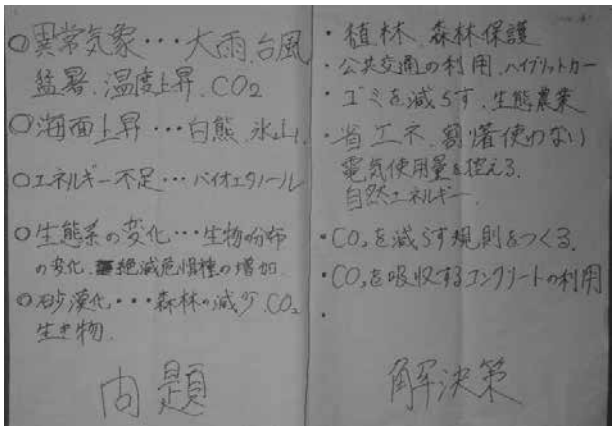


＜分科会発表　⑤ 地球温暖化 A＞

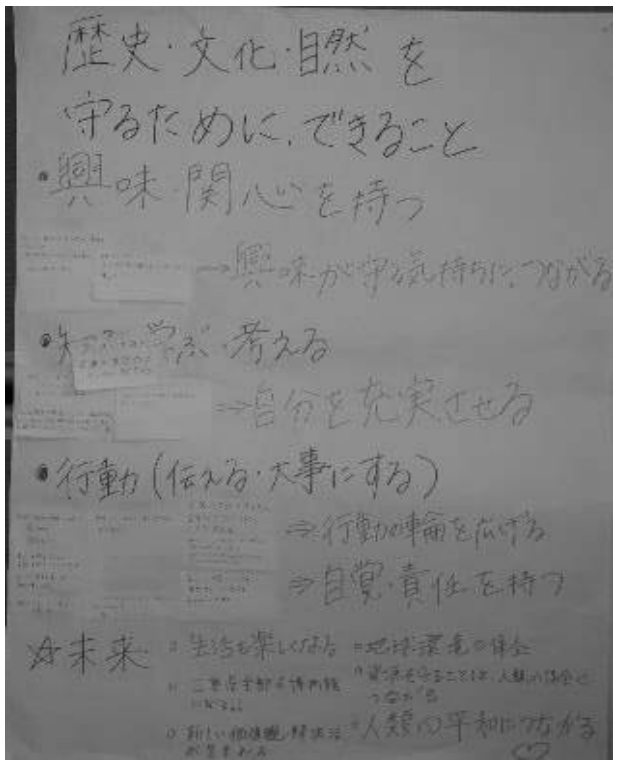




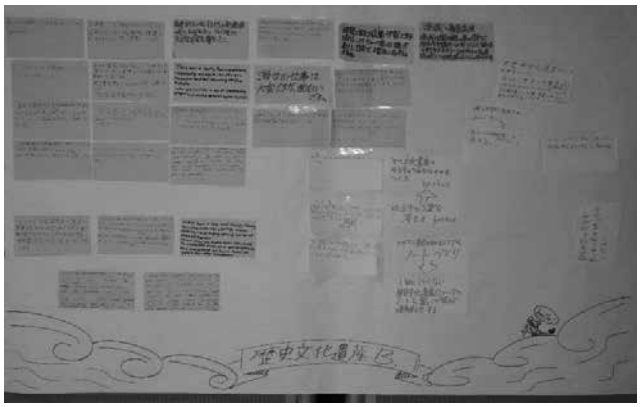
＜分科会発表　⑥ 地球温暖化 B＞

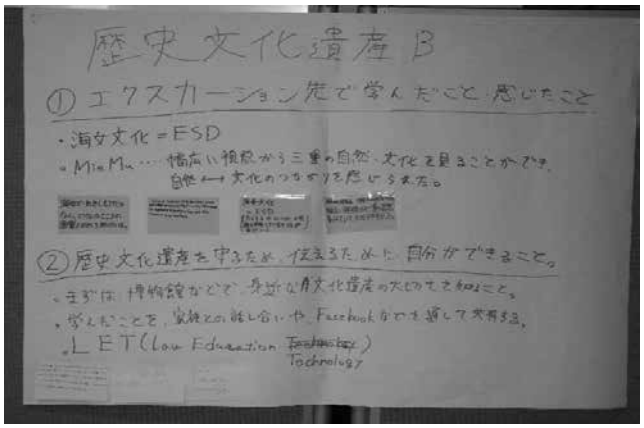


＜分科会発表　⑦ 歴史文化遺産 A＞



＜分科会発表　⑧ 歴史文化遺産 B＞





＜分科会発表　⑨ 国際理解 A ＞

＜分科会発表　⑩ 国際理解 B＞

＜分科会の作業風景＞

7.「ESD in 三重 2014」関連放送・新聞掲載情報

＜ テレビ ＞

放送日時	放送社名	番組名
平成 26 年 11 月 7 日 16:50～	CBC テレビ	「イッポウ」
平成 26 年 11 月 7 日 18:30～	NHK 総合・津	「ほっとイブニングみえ」
平成 26 年 11 月 8 日 18:00～	三重テレビ	「三重テレビニュース」
平成 26 年 11 月 10 日 18:30～	NHK 総合・津	「ほっとイブニングみえ」
平成 26 年 11 月 10 日 21:56～	三重テレビ	「三重テレビワイドニュース」

＜ 新聞 ＞

掲載日時	掲載紙名	記事の見出し
平成 26 年 10 月 29 日	讀賣新聞 日刊	ESD in 三重 概要発表
平成 26 年 10 月 31 日	朝日新聞 夕刊	四日市公害の教訓 世界へ 名古屋で来月 ESD ユネスコ会議、三重大発表
平成 26 年 11 月 1 日	伊勢新聞 日刊	AQUA SOCIAL FES!!2014 ※
平成 26 年 11 月 4 日	讀賣新聞 日刊	公害教訓に街づくり
平成 26 年 11 月 7 日	毎日新聞 日刊	三重大 ESD 世界会議前に 学生ら環境問題考慮
平成 26 年 11 月 8 日	中日新聞 日刊	各国学生交流し ESD 推進策 ユース会議開幕 鳥羽で海女社会の仕組み学ぶ
平成 26 年 11 月 8 日	讀賣新聞 日刊	世界の若者 三重学ぶ ESD 関連イベント「海女の生活 自然と調和」
平成 26 年 11 月 9 日	伊勢新聞 日刊	松名瀬海岸、清掃し観察 松阪 400 人、19 カ国の学生らも ※
平成 26 年 11 月 11 日	中日新聞 日刊	環境保護の必要性訴え ESD ユース会議 三重大で各国学生ら
平成 26 年 11 月 11 日	讀賣新聞 日刊	「命あふれる地球 未来に」 三重大でシンポ ユース宣言採択
平成 26 年 11 月 11 日	朝日新聞 日刊	豊かな自然 未来へ 19 カ国の学生 210 人「ユース宣言」
平成 26 年 11 月 11 日	日本経済新聞 夕刊	「四日市」の教訓 世界へ 三重大生 環境教育を発信
平成 26 年 11 月 11 日	毎日新聞 日刊	ESD の成果を報告 三重大 期間中の感想など発表
平成 26 年 11 月 13 日	讀賣新聞 日刊	「八百万の神」世界に発信 「四日市学」を開講した三重大副学長
平成 26 年 11 月 13 日	讀賣新聞 日刊	三重大環境戦略 現状と展望報告 名古屋でセミナー
平成 26 年 11 月 13 日	朝日新聞 日刊	「学んだこと、ぜひ実践を」 三重大の朴恵淑・副学長が発表
平成 26 年 11 月 19 日	讀賣新聞 日刊	公害の教訓 未来に生かす

※ 資料集での掲載なし

讀賣新聞　平成26年10月29日　日刊

ESD in 三重 概要発表

三重大学は、11月7～12日に開催する「ESD in 三重2014～アジア・太平洋持続可能な開発のための教育（ESD）ユース世界会議～」の概要を28日発表した。

ユース世界会議は11月10～12日、名古屋国際会議場（名古屋市熱田区）で開かれる「持続可能な開発のためのESDに関するユネスコ世界会議」の関連イベント。日本を含むアジア・太平洋地域の小中高校生と大学生計約100～200人が、環境や生物多様性の保全、国際理解などを体験・学習し、次世代の担う役割を見いだすことを目的にしている。

7日は2グループに分かれ、三重大所属の練習船「勢水丸」に乗船して海の多様性を学んだり、海の博物館（鳥羽市）の海女小屋で海女と交流したりする。8、9日には松名瀬干潟（松阪市）や斎宮歴史博物館（明和町）で生き物の生態系、斎宮の歴史・文化に触れた上で、8分科会に分かれ、10日の国際シンポジウムで発表するユース宣言をまとめる。

また、同大学はユネスコ世界会議の会場の駐車場にブースを出展し、最終日にユース世界会議の成果なども報告する。内田淳正（あつまさ）学長は「環境教育などの非常に重要な会議なので、三重大学としても大きく貢献したい」と話している。

朝日新聞　平成26年10月31日　夕刊

四日市公害の教訓 世界へ

名古屋で来月 ESDユネスコ会議、三重大発表

環境分野、人材教育に貢献

11月に名古屋市で開かれるESD（持続可能な開発のための教育）ユネスコ世界会議で、三重県の四日市公害を学ぶ「四日市学」などの環境教育について、三重大（津市）が発表する。高度経済成長期の大気汚染で多くの犠牲者を出した教訓を、環境など地球規模の問題に挑む人材を育てるESDに生かそうとする。

三重大工学部3年生の中村浩俊さん（23）は10月中旬、キャンパスでESD世界会議に合わせた三重大のイベント「ESD in 三重」のパンフレット作りに追われていた。「まさか自分が環境にここまで関わるとは」と照れながら話す。

入学時、環境活動をするなど学生団体に勧誘されて入った。活動を通じて関心が高まり、2年生でリーダーに。四日市学の講義で衝撃を受けたのはそのころだ。

四日市公害訴訟の元原告で、元漁師の野田之一さん（82）らの話を聞いた。「大気汚染のイメージが強かったが、魚の背骨が曲がるなど、海への水質汚染もあったのは知らなかった。座学だけではなく、フィールドに出ないといけないと思った」と振り返る。

上三重大のキャンパスで「ESD in 三重」のポスターを持つ中村浩俊さん＝津市　下四日市公害訴訟判決40周年の2012年、三重大での環境シンポジウムには学生ら約200人が参加。公害語り部の講演もあった＝三重大提供

独立行政法人化により国立大が転換点を迎えた2004年、三重大は環境教育を前面に打ち出した。この10年間、四日市学を大きな柱として、学部に関係なく受講を認めてきた。

四日市公害を環境学の面だけでなく、公衆衛生や法律、行政、経済など学問を横断した切り口でとらえた。四日市ぜんそくと並ぶ四大公害病の水俣病を研究する第一人者、故・原田正純医師らも講師に招いた。

四日市学の提案者で、副学長の朴恵淑教授（60）＝環境地理学＝は、こうした環境教育は「三重大だからこそできる」と語る。

三重大では、大気汚染とぜんそくの因果関係を立証した吉田克己・名誉教授をはじめ、様々な分野の研究者が公害の調査に携わってきた。大学として成果をまとめることは長らくなかったが、四日市学に集結させた。受講者は年々増え、今年度は約250人が学ぶ。

環境教育は四日市学にとどまらない。環境関連で一定の単位を取った学生に修了証を与える環境資格支援教育プログラムを、07年に開始。09年の三重大環境方針では「先進的な環境知識と行動力、環境マインドを兼ね備えた学生を社会に輩出する」と宣言した。

ESDと連携し環境教育実践の幅を広げようと、09年にはESDの推進拠点となるユネスコスクールに加盟。プログラム名も12年度からESDプログラムに変え、対象を法学や経済学など教養科目に広げた。昨年度までの7年間で600人以上が修了証を受けた。

三重大は11月10～12日のESD世界会議で、会場の名古屋国際会議場にブースを設け、こうした取り組みを紹介。12日の交流セミナーでは、ESDの歩みと重なる10年間の成果を朴教授らが発表する。中村さんら学生も参加するという。

朴教授は力を込める。「四日市学は、公害を過去の負の遺産でなく、未来志向の正の遺産として捉え直そうという試みです。教訓を大切にし、環境問題を自分たちの問題として捉えて行動する学生をこれからも育てたい」（坂本進）

ESD（Education for Sustainable Development＝持続可能な開発のための教育）

環境や貧困、人権、平和、開発など現代の地球規模の課題の解決へ行動する力をつける教育。日本政府とNGOの提案で、国連は2005～14年を「ESDの10年」とした。今年の世界会議で、10年間の総括と今後の取り組みを話し合う。関連イベントのESD交流セミナーでは、三重大のほか、中部大や、東海地方の企業やNPOなどが参加する「中部ESD拠点協議会」による発表もある。

■三重大のイベント「ESD in 三重」

▽11月6～10日。三重県内や韓国、米国の学生約100人が参加
▽伊勢湾での洋上学習や、松阪市の松名瀬干潟の清掃活動をする
▽10日に三重大でシンポジウム。阿部治・日本環境教育学会長の講演や、学生たちのESDユース宣言も

讀賣新聞 平成26年11月4日 日刊

公害教訓に街づくり

未来育む ESD 下

市民で意識共有 水俣

有機水銀に汚染されたヘドロを封じ込めた水俣湾の埋め立て地に立つ田中さん（右）（熊本県水俣市で）

「持続可能な開発のための教育（ESD＊）」が目指す、環境汚染や温暖化など世界的な課題を解決する担い手の育成。立教大学ESD研究所長を務める阿部治教授（環境教育）は、水俣病㊟を経験した熊本県水俣市が「その先駆的な地域」と話す。公害から得た教訓を、まちづくりや人づくりに生かしてきたからだ。

「症状の重い劇症型の患者の写真を見せるだけが、水俣病の教育じゃない」。2012年3月まで熊本県内の小学校教諭を務めた田中睦さん(63)は強調する。

田中さんは教職に就いた1974年、水俣市へ赴任した。熊本地裁が、原因企業チッソの責任を認めた一次訴訟判決の約1年後だ。定年までのほとんどを同市で過ごし、児童らに水俣病について教えてきた。重い後遺症。奇病や伝染病扱いされた患者への不当な差別。具体的な事例を引用しながら、公害が引き起こした悲劇を説明した。

現在、同県内の全公立小学校では、5年生が授業で水俣市を訪れ、資料館を訪れたり、語り部の話を聞いたりしている。

「単にチッソや行政を悪者扱いするのではなく、なぜ公害が発生したのか、その結果どういうことが起こったかを自分たちで考えさせることが、教訓を学ぶことにつながる」と、田中さんは語る。

□ □

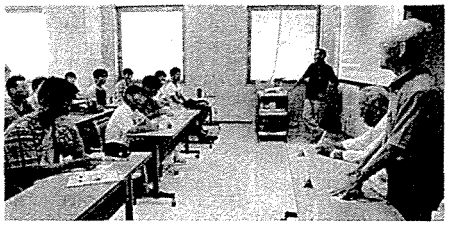
元水俣市環境課長として様々な施策に携わった吉本哲郎さん(66)は「環境を守る取り組みで、公害による悪いイメージを払拭するようなまちづくりがしたかった」と振り返る。

ゴミ減量のため、講習を受けた市民が収集日にゴミの集積場に立ち、分別を助言。「村丸ごと生活博物館」と銘打った事業では、市民がおもてなし役を務め、研修で訪れる自治体職員や大学生らを美しい風景の棚田に案内するなどしている。

阿部教授は水俣の「ESD」を高く評価し、こう指摘する。「人間社会と環境、経済の調和が図られて、初めて『持続可能な開発』は可能になる。公害に対する反省は、そのためにどうすればいいか、考えるべき要素を全て含んでいる」

㊟水俣病 チッソ水俣工場の排水に含まれていた有機水銀に汚染された魚介類を食べ、中枢神経を侵されて発症。手足の感覚障害や運動失調、視野狭窄（きょうさく）などが主な症状。1956年に初めて患者が確認されたが、当初は原因不明の「奇病」とされ、排水や漁業は規制されず、国が原因を認定したのは12年後の68年だった。

大学 多角的に検証 四日市


四日市ぜんそくの認定患者を招いて行われた四日市学の講義（2011年7月、津市の三重大学で）＝朴恵淑副学長提供

三重大は2004年、水俣病と並ぶ四大公害の一つ、四日市ぜんそくから学ぶ「四日市学」を開講した。三重県四日市市で、大気汚染が引き起こした四日市ぜんそくについて、大学教員だけでなく、認定患者、行政、企業の関係者らが講師を務め、発生のメカニズムや有効な環境政策、企業の社会的責任など様々な角度から検証してきた。

07年度には、四日市学を含む環境関連の約60科目から、5科目以上の単位を取得した学生に修了証を与える「環境資格支援教育プログラム」を開始。12年度からは「ESDプログラム」と呼び方を変えた。当初16人だった修了者は、昨年度は367人にまで増えた。

名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で10日から始まる「ESDに関するユネスコ世界会議」では、会場に大学や学生の環境問題への取り組みを紹介するブースを出し、四日市公害の写真展の様子や、生物多様性調査のパネルなどを展示する。12日は、四日市学を提案した朴恵淑副学長が、世界から集まった専門家に、三重大の環境教育をビデオなどで説明。学生が、どういう思いで学び、今後どう生かすのかを発表する。

朴副学長は「負の遺産を正の資産に変えようとしている水俣市に見習うべき点は多い。四日市学を通じ、地球規模の問題を解決に導く人材を育てていきたい」と言葉に力を込めた。

（この連載は黒木健太朗、天沢正裕、藤川拓生、中村和男が担当しました）

＊ESD＝Education for Sustainable Development

毎日新聞　平成26年11月7日　日刊

三重大 ESD世界会議前に 学生ら環境問題考慮

説明を聞く参加者ら＝津市の三重大で

ユネスコ（国連教育科学文化機関）が推進する「持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）」に関する世界会議が10日に名古屋市で開幕するのに先立ち、県内の学生らが環境問題などについて考える「ＥＳＤｉｎ三重２０１４」（三重大主催、毎日新聞社など後援）が6日、津市の同大で始まった。

同大の学生や留学生、韓国や米国からの特別参加生など計20カ国約２００人が参加。12日までの期間中、同大実習船「勢水丸」での海底調査、鳥羽市の「海の博物館」や海女小屋の見学、松阪市の松名瀬海岸の清掃活動などを行う。

参加者は県内での成果をまとめ、10日に報告や宣言の採択を行う。また代表者らが名古屋の世界会議で同大のブースを出展し、来場者らに成果を発表する予定。

6日はオリエンテーションが行われ、参加者のうち75人が出席し、担当者の説明を聞いた。

【永野航太】

中日新聞　平成26年11月8日　日刊

各国学生交流しESD推進策

ユース会議開幕 鳥羽で海女社会の仕組み学ぶ

「持続可能な開発のための教育」（ESD）のユース会議（中日新聞社など後援）が七日、県内で開幕した。二十カ国の学生が十日までの日程で交流を図りながらESDの推進策を考える。（中谷秀樹）

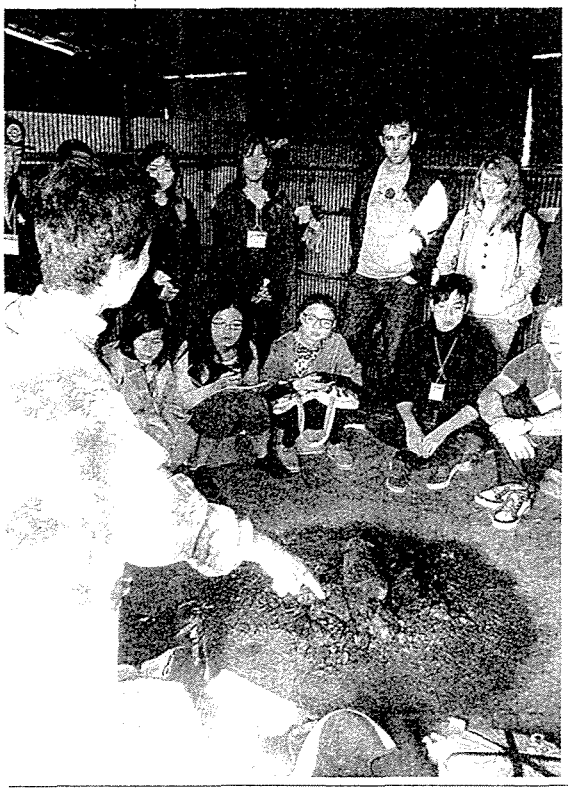
ESDは環境保全や国際理解、伝統文化の継承など地球規模の課題を考え、解決する力を養う教育活動。ユース会議は津市の三重大が主会場で、十日に名古屋市で開幕する全体会合に先がけて学生向けに開かれた。

初日は実地研修として鳥羽市国崎町の海女小屋、同市浦村町の海の博物館を見学したほか、松阪市の松阪港で三重大の練習船に乗って海洋観光学習を進めた。県内の大学生や高校生、三重大の留学生など百人が参加した。

海女小屋では現役の海女が講師となり、アワビやサザエの採取法や道具、磯場の資源を維持するために禁漁期間を定めていることなどを説明。参加者は海女の社会の仕組みについて理解を深めた。

韓国の大学三年生、シン・ジュヨンさん（二三）は「単に海産物を捕って売るだけではなく、決まりがあってやりくりしていることに驚いた」と話していた。

八日には松阪市の松名瀬干潟の清掃や環境学習に取り組んだ後、若い世代がESDで担う役割をまとめた「ESDユース宣言」を策定。最終日の十日に三重大で開く国際シンポジウムで採択する。



海女小屋で現役海女らの説明を聞く各国の学生たち＝鳥羽市国崎町で

讀賣新聞　平成26年11月8日　日刊

世界の若者 三重学ぶ

ESD関連イベント

「海女の生活 自然と調和」

大畑さん（右端）から海女漁の道具について説明を受ける学生ら（鳥羽市国崎町の海女小屋で）

地球規模の問題を解決する人材を育成する「持続可能な開発のための教育（ESD）」の世界会議が名古屋市で10～12日に開かれるのを前に、関連イベント「ESD in 三重2014～アジア・太平洋ESDユース世界会議～」（三重大学など主催、読売新聞社など後援）が7日、県内で始まった。

ユース世界会議は、アジア・太平洋地域の若者が文化や年齢の違いを超えて交流し、環境保全や文化の保存・継承などのプログラムを体験、将来を担う世代として提言をまとめるのを目的としている。

7日は県内の高校生や大学生のほか、アメリカ、中国、韓国、ベトナムなど計20か国の学生ら約100人が参加。鳥羽市浦村町の「海の博物館」で、2000年以上の歴史を持つ海女の生活や文化などを学んだ後、同市国崎町の海女小屋で、現役の海女から海女漁や漁の道具について説明を受けた。

海女歴40年の大畑いちえさん(64)から、資源を守るため年間の漁期が定められていることや、午前中の1時間半しか漁に出ないことなどを教わった韓国の大学3年生シン・ジュヨンさん(22)は「色々な決まりを設けて、自然との調和を図りながら漁をしている海女の生活は勉強になった」と感心した様子だった。

また、学生らは松阪港から三重大の練習船「勢水丸」に乗船し、底引き網で捕れた海の生物の調査も体験した。

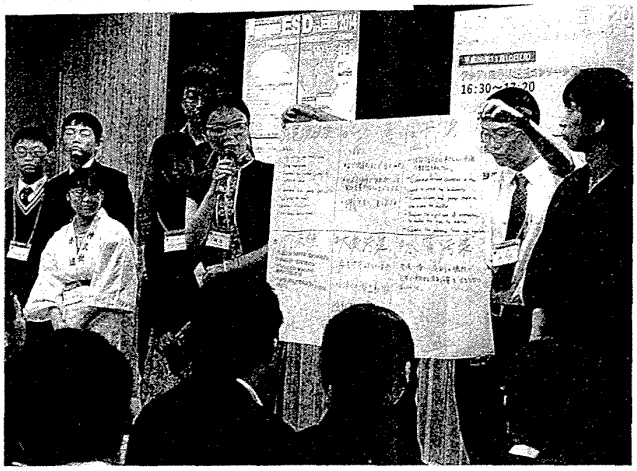
ユース世界会議は12日までの日程で開かれており、8日は松名瀬干潟(松阪市)で清掃活動を行った後、斎宮歴史博物館（明和町）を見学する。学生らは9日に「ユース宣言」をまとめ、三重大で10日に開かれる国際シンポジウムで発表する。

中日新聞　平成26年11月11日　日刊

環境保護の必要性訴え

ESDユース会議　三重大で各国学生ら

七日から三重大（津市栗真町屋町）を拠点に県内で開かれていた、持続可能な開発のための教育（ESD）のユース会議（中日新聞社など後援）は十日、同大で国際シンポジウムがあり、学生らが前日までに学んだことを報告した。（畑間香織）



会議は、同日に名古屋市熱田区の名古屋国際会議場で開幕したESDに関するユネスコ世界会議のパートナーシップ事業。次世代を担うアジア・太平洋地域の若者が環境保全や文化の継承を学び、考える目的で三重大が主催した。

日本を含む十九カ国の中学・高校、大学生の二百十人が参加。三重大の練習船に乗って海底の堆積物の観察や生物調査をしたり、鳥羽市の海女小屋で海女に話を聞いたりした。

これらを踏まえて学生らは、「生物多様性」「地球温暖化」など五つの分科会で意見を交換。国際シンポジウムでは、分科会別に意見を発表した。生物の乱獲を防ぐための規制強化や罰金を科す提案をはじめ、周りの人に地球温暖化の実情を伝える必要性を訴えた。

最後には、自然環境を次世代に残したり、国際的な視点で問題解決に協力したりするなど、若い世代がESDに貢献することをまとめた「ユース宣言」を採択した。

讀賣新聞　平成26年11月11日　日刊

「命あふれる地球 未来に」

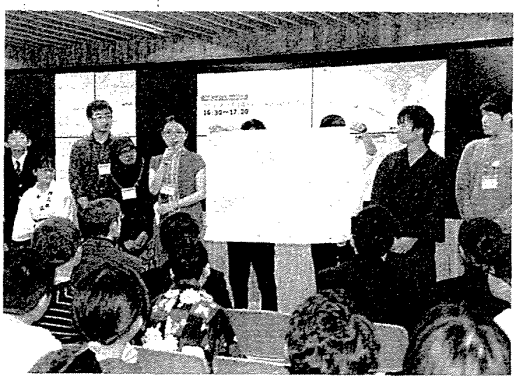
三重大でシンポ ユース宣言採択

「持続可能な開発のための教育（ESD）」の世界会議が名古屋市で開幕した10日、県内でも関連イベント「ESD in 三重2014～アジア・太平洋ESDユース世界会議～」（三重大主催、読売新聞社など後援）の国際シンポジウムが津市の三重大で開かれ、学生らが「命あふれる地球を未来に引き継ぐ」とする「ユース宣言」を採択した。

未来育む ESD

ユネスコ世界会議

ユース会議は、ESD世界会議に先立ち、7～12日の日程で県内で開かれており、アジア・太平洋地域の19か国から中高生、大学生計210人が参加。伊勢湾での海洋生物の調査や松阪市の海岸での清掃活動など野外学習に取り組みながら、防災学習▽生物多様性▽地球温暖化▽歴史文化遺産▽国際理解――の各分科会に分かれて学んでいる。



各分科会で学んだことを発表する学生たち

シンポジウムでは、学生ら計82人が、分科会で学んだことをテーマ別に発表。生物多様性がテーマのグループは「小さな貝は捕らず海の資源を取り尽くさない海女の生き方こそ、持続可能な世界を創るのにふさわしいと感じた」と報告した。

参加者は最後に、全員でユース宣言を読み上げた。宣言では「地球上の全ての命が調和する世界の創造」を目指して環境保全や文化の継承などに取り組むとし、「現代社会の問題に注意を向け、積極的に知識を習得し、解決に挑む」と結んだ。

12日には、参加者の代表約50人が名古屋市で開かれるESD世界会議の「ESD交流セミナー」に出席、学習の成果を発表する。

朝日新聞　平成26年11月11日　日刊

豊かな自然 未来へ

19カ国の学生210人「ユース宣言」

名古屋市で開かれているESD（持続可能な開発のための教育）ユネスコ世界会議に合わせ、三重大学で10日、ESD in 三重「アジア・太平洋環境コンソーシアム国際シンポジウム」があった。学生たちは豊かな自然環境を残していくことなどを盛り込んだユース宣言を読み上げた。

ESD ユネスコ世界会議

三重大で関連行事

㊤ユース宣言を読み上げる学生たち ㊦シンポジウムで生物多様性を維持するための対策などを発表する高校生たち＝いずれも津市の三重大

ESD in 三重には、三重大の学生を始め、県内の中高生、アメリカや韓国の学生など、19カ国から210人が参加。6日のオリエンテーションを皮切りに、三重大が所有する練習船「勢水丸」を使った伊勢湾での洋上学習や、松阪市の松名瀬干潟での生態系調査などをしてきた。

シンポジウムでは、地球温暖化や森林減少などの問題に対して、学生が考えた解決策などの報告もあった。「生態系を乱すようなことに対して、規制を強化するべきだ」「こういう問題があるんだというのを伝えていくことが大事」などの提案が出た。学生たちが考えたユース宣言では「命あふれる地球を未来に引き継ぐことに努めます」と誓った。

三重大人文学部の留学生でベトナム人のホアン・リ・トゥ・トゥイさん（21）は、「もともとあまり環境問題に関心がなかったけど、大事だと思った。もっと積極的に取り組みたい」と話していた。

三重大によるESD in 三重では、世界会議の会場でのブース展示もしており、12日には交流セミナーで発表をする。（坂本進）

日本のESD第一人者 阿部教授が講演

シンポジウムでは、日本のESD第一人者である阿部治・立教大教授も記念講演した。学生たちを前に「これからの未来をつくるのは若者のみなさん。どういう社会にしたいか考えてほしい」と呼びかけた。

阿部教授はこの日始まった名古屋市での世界会議の合間にかけつけた。国連の幹部が「これまでの10年は準備期間」と話していたことを紹介し、「これからが本番。全国にESDを広げていきたい」と語った。また、国の地域再生事業について、「人が育つESDが一番適している」と話した。

「四日市」の教訓 世界へ

三重大生 環境教育を発信

ユネスコ世界会議の会場で説明に立つ三重大の学生
（11日午前、名古屋市熱田区）

持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）について話し合うユネスコ世界会議が11日、2日目を迎えた。名古屋市の会場では三重大（津市）の学生らが四日市公害などについての環境教育の取り組みを発表している。公害を様々な視点から学ぶ「四日市学」の開講から今年で10年。高度経済成長期に多くの犠牲を出した大気汚染の教訓を、世界に向けて発信している。

「風化させぬ…知って」

この日午前、名古屋国際会議場（名古屋市熱田区）の屋外に設けられたテントでは、三重大の学生らが四日市公害などに関するパネル展示の前で来場者への説明に立っていた。

人文学部4年、三輪穂希さん（23）は、2年時に四日市学を学んだ。「講義で患者の方の体験を聴き、苦しみが伝わってきた」と話し、「環境改善への取り組みは進んでいるけれど、公害を風化させないため、多くの人に知ってもらいたい」と力を込めた。

三重大は2004年、水俣病などと並ぶ四大公害の一つ、四日市ぜんそくを学ぶ「四日市学」を開講した。講義では教員だけでなく、公害訴訟の原告となった患者に当時の体験を語ってもらうほか、企業・行政の関係者や他の公害の研究者らも講師に招き、公害を様々な視点から学ぶ。

「四大公害のなかで唯一の大気汚染。その原因や社会に与えた影響を深く突き詰め、伝えていく人材を育てていかなければならない」。四日市学を提唱し、開講にも携わった同大の朴恵淑副学長（60）は強調する。

07年度からは四日市学を含む50以上の環境関連の科目から5科目の単位を取得した学生に修了証を与える「環境資格支援教育プログラム」を開始。12年度から名称を「ＥＳＤプログラム」に改め、13年度は320人が修了した。

名古屋市でのユネスコ世界会議開催に先立ち、三重大は7日から「ＥＳＤin三重2014」を開催。日本の学生のほか、中国や韓国、ドイツなど18カ国から約90人の学生が参加し、同大の練習船に乗って海洋生物の生態を観察したほか、松阪市の松名瀬干潟で清掃活動を行った。

名古屋国際会議場では12日まで、学生らが四日市学やＥＳＤin三重の取り組みをパネルで紹介。同日午後に予定されている交流セミナーでは、朴副学長が10年間に及ぶ四日市学の成果などについて講演。朴副学長は「四日市の教訓を伝え、公害を未来に向けた遺産として世界に発信していきたい」と話している。

ESD ユネスコ世界会議

ESDの成果を報告

三重大 期間中の感想など発表

毎日新聞　平成26年11月11日　日刊

国内外の学生が県内各地を回り、環境問題などについて考える「持続可能な開発のための教育（ESD）in三重2014」（三重大主催、毎日新聞社など後援）の成果報告会が10日、同大で行われた。

名古屋市でこの日開幕した「ESDに関するユネスコ世界会議」の関連事業。同大の学生や留学生、米国や韓国からの参加生ら計19カ国約200人が6日から各地を回った。学生らは同大の実習船「勢水丸」の海底調査や松名瀬海岸（松阪市）の清掃活動に参加したほか、鳥羽市の海女小屋などを訪問した。成果報告会では、グループごとに期間中の感想などを発表。アジア各国の若者が協力し、生態系の保護や資源の有効活用に取り組むことをうたった大会宣言も採択した。

宣言文を読む学生ら＝津市の三重大で

参加した米国カリフォルニア大のケビン・チェンさん(20)は「伝統的な海女漁は海産資源の保護につながると思う。見学できて有意義だった」、韓国の高校生ミンス・リーさん(18)は「多くの国の学生と交流し、議論することができた。環境学に興味があり、今後の勉強に生かしたい」と話した。【永野航太】

讀賣新聞　平成26年11月13日　日刊

「四日市学」を開講した三重大副学長

朴恵淑（ぱくけいしゅく）さん 60

——私とESD——

「八百万の神」世界に発信

四日市ぜんそくを被害者や企業、行政といった様々な角度から検証する「四日市学」を10年前に開講するなど、主に環境の視点でESDに関わっています。12日には、これまでの成果を世界会議の併催イベントで学生らと発表しました。

環境問題に関心を持ったのは、韓国にいた小学生の頃。授業で四日市ぜんそくを学んだのがきっかけでした。煙突から出る黒い煙や、学校の水道で一列になってうがいをする児童の写真が印象に残っています。

人間は誰しも、経済的に豊かになりたいという欲を持っています。でも、欲のままに生きれば環境が負担に耐えられない。ESDは環境に配慮しながらどう生きるかを考えること。生き方が変われば、それに伴って技術革新も起こります。

日本には、自然の中に「八百万（やおよろず）の神」が宿るという信仰があります。ESDが目指すものと同じ素晴らしい精神で、ESDの推進を日本から世界に発信することは意義深い。会議をきっかけに世界中にESDの理念が広まり、ともに行動する仲間が増えることを願っています。

讀賣新聞　平成26年11月13日　日刊

未来育む ESD

ユネスコ世界会議

三重大環境戦略 現状と展望報告

名古屋でセミナー

名古屋市で開かれている「持続可能な開発のための教育（ESD）」の世界会議の併催イベント「ESD交流セミナー」で12日、三重大関係者らがESDへの取り組みを発表した。

セミナーでは、伊勢湾に面する大学の立地条件を生かした風力発電設備などの導入により、3年間で二酸化炭素排出量を計32％削減したことなど、環境戦略の現状と今後の展望を報告した。

「ESD in 三重」でまとめたユース宣言を読み上げる学生たち

関連イベント「ESD in 三重2014」（読売新聞社など後援）の参加者の代表約60人も学習成果を発表。2年の河村海斗さん(20)は「海の環境を守るには根付く文化を守ることが大切だと知った」と話した。朴恵淑副学長は「今日は新たなESDのスタート。国により問題の優先順位は違うが、世界が大きな一つの輪を作ってESDに取り組む先導役を三重大が担いたい」と語った。

朝日新聞　平成26年11月13日　日刊

「学んだこと、ぜひ実践を」

三重大の朴恵淑・副学長が発表

四日市公害研究を紹介

名古屋市で開かれている「持続可能な開発のための教育」（ＥＳＤ）に関するユネスコ世界会議の最終日の12日、三重大学が会議の関連セミナーで、これまでに取り組んだ環境教育などについて発表した。副学長の朴恵淑教授は「ＥＳＤは今日で終わるのではなく、今日からまた始まる」と呼びかけた。

ESD
ユネスコ世界会議

セミナーは世界会議の会場である名古屋国際会議場内で開かれた。

朴教授は三重大が四日市公害の研究を原点に、２００４年に「四日市公害から学ぶ四日市学」を開講したことを紹介。「公害が起きてしまった以上、隠してはいけない。アジアの国々では、同じような問題がこれから起きるかもしれない。その時に、四日市の経験が役に立つ」と訴えた。

三重大の取り組みを紹介する朴恵淑副学長＝名古屋市熱田区の名古屋国際会議場

三重大では四日市学を含めて、環境や経済など約60科目から、一定科目を履修した学生に修了証を与える「ＥＳＤプログラム」を独自に構築し、前身の「環境資格支援教育プログラム」を07年から始めた。朴教授は「16年までに半分の学生が、このプログラムを修了できるようにしていきたい」と語った。

また、キャンパスの省エネに取り組み、13年度の二酸化炭素の排出量を、10年度に比べて27・3％削減したことや、12年に地域の人も利用できる「環境・情報科学館」を開館した事例も説明した。

朴教授は、三重大として今後も積極的にＥＳＤに取り組んでいく姿勢を明らかにした上で、会場の若者に向けて、「ＥＳＤから学んだことをぜひ実践してほしい」と語りかけた。

（坂本進）

讀賣新聞　平成26年11月19日　日刊

公害の教訓 未来に生かす

「四日市学」10年

学びの今

三重大

四日市公害を負の遺産ではなく、未来への正の遺産として捉え、その教訓を学ぶ科目「四日市学」が三重大で開講されて今年で10年。これまでに2000人以上が受講し、卒業後、自治体で環境行政に携わる人材も出ている。

■生き証人が講師

「大きな工場がやってきて、市も市民も金持ちになると思っていたのに、ぜんそくを患い、美しい海岸の松林も失った」

毎年講義をしてきた野田之一さん(82)は学生に語りかける。野田さんは元漁師で、四日市公害訴訟の元原告9人のうち、唯一の生存者だ。

三重大は2004年、学内で01年に始めた研究会を原点に、全学部共通科目「四日市学」を開講した。大気汚染や海洋汚染のメカニズム、有効な環境政策、企業の社会的責任など、様々なアプローチで四日市公害を再評価し、その教えを学んでいる。

だが最大の特徴は、大学教員のほかにも、同公害の認定患者や語り部、加害企業、行政などの当時の関係者が講師を務める点だ。

今年度前期に受講した生物資源学部1年の歌野原徹也さん(19)は「四日市公害には大気汚染のイメージだけを持っていたが、悪臭や魚の背骨のわん曲など、海の水質汚染もあったとは知らなかった。生き証人の話には重みがある」と振り返る。

■受講生年々増加

副学長の朴恵淑教授(60)は開講時、「アジアの途上国で今後、同様の公害が起きるかもしれない。その時、四日市の経験が教訓になる」と、講師の招聘に奔走した。四日市公害と並ぶ四大公害の一つ、「水俣病」を研究する原田正純医師(2012年死去)も生前、「水俣学と四日市学を共に発展させたい」と引き受けていた。

受講生は年々増え、今年度は約270人が学んだ。全員が四日市市を訪問し、環境学習センター公害資料室や、当時子供たちが利用した市立塩浜小学校のうがい場などを視察している。

■学生に修了証も

数か月間の就業実習も奨励。受講生は国内外の大学や企業で、環境教育の教材作りや工業団地での環境調査などを体験している。

同大ではまた、四日市学を含め、環境関連で一定の単位を取った学生に修了証を与える環境資格支援教育プログラム(現・ESDプログラム)を07年からスタート。朴教授は、学生全体の授与率を16年に50%に上げることを目指している。

「四日市学を通じて、環境問題に積極的に取り組む意思を持つ学生を育てたい。それが就職活動でも三重大のブランドになるはず」と朴教授は力を込めた。（吉富萌子）

講義の一環として開かれたシンポジウムで、当時の様子を伝える野田さん（右）ら（三重大提供）▼

★MEMO★

問い合わせ・連絡先：
三重大学国際環境教育研究センター支援室
〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577
TEL 059-231-9976
FAX 059-231-9859
E-mail shien@gecer.mie-u.ac.jp

MIE
UNIVERSITY